

平成 26 年 4 月 7 日現在

機関番号：23803

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24810021

研究課題名(和文) アフリカ熱帯林における持続的な開発と保全のための実践的地域研究

研究課題名(英文) Practical Area Studies for Sustainable Development and Conservation in African Rainforests

研究代表者

松浦 直毅 (Matsuura, Naoki)

静岡県立大学・国際関係学部・助教

研究者番号：60527894

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、アフリカ熱帯林のふたつの保護区において、地域社会の特徴に応じた開発モデルを検討することによって、実効性ある保全政策を提案することである。ガボン共和国のムカラバ・ドウドウ国立公園および、コンゴ民主共和国のルオー学術保護区において現地調査を実施し、地域住民の生活と社会の実態について解明するとともに、開発事業に関する調査を通じて、持続的な開発と自然保護の両立について検討した。

研究成果の概要(英文)：This study aims to suggest an effective conservation policy through the examination of development models based on local characteristics in two protected areas of African rainforests. Field study have been conducted in the Moukalaba-Doudou National Park in Gabon and the Luo Scientific Reserve in Democratic Republic of the Congo. The author elucidated livelihoods of local people and their social systems and discussed biodiversity conservation practices along with sustainable development.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：アフリカ熱帯林 ガボン コンゴ民主共和国 生物多様性保全 持続的開発 地域住民

1. 研究開始当初の背景

(1) アフリカ熱帯林の保全は地球規模の重要課題であるが、有効な体制が整っている保護区はほとんどない。その大きな要因は、自然保護と住民生活のあいだに対立があるために、自然保護活動が妨げられていることにある。保全政策が住民生活にもたらす負の影響に対する補償や、保全によってえられる利益の還元が十分でないために、住民の不満が高まり、自然保護活動が妨げられているのである。自然保護の現場では、「住民参加型」の手法が主流になっており、人間活動が環境保全に果たす肯定的な役割にも注目が集まりつつあるが、アフリカの熱帯林においては、住民の生活や文化に十分な配慮がなされ、住民が適切に参加した保全政策が確立されていないのが現状である。

(2) 研究代表者は、2002年からアフリカ熱帯林地域で人類学的研究に従事しており、2009年からは、アフリカ熱帯林の生物多様性保全をテーマとするプロジェクトにも参画して、保全と開発の両立を検討してきた。このプロジェクトにおいて、熱帯林の生物多様性保全のためには、保全と両立した地域開発の推進が不可欠であることが明らかになり、住民主体による開発事業の実践を特色とする本研究を着想した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、アフリカ熱帯林の保護区において、地域社会の特徴に応じた開発モデルを検討することによって、実効性のある保全政策を提案することである。これまでの調査で培われた人類学的知見をもとに、参加型アクションリサーチの手法を用いて、住民主体で開発事業を実践することで、地域社会に適合した開発モデルを考案する。この開発モデルを保全政策に組み込むことで、住民が適切に参加した自然保護活動のための指針を示す。そのために、具体的に以下の4点を目指す。(1) 人類学的な観点から、社会経済状況を明らかにする、(2) 住民組織や諸アクターの分析によって、保護と開発の現状を明らかにする、(3) 地域開発事業の立案と実施を通じて、有効な開発モデルを考案する、(4) 開発モデルを組み込んだ実効性ある保全政策を提案する。

3. 研究の方法

本研究では、アフリカ熱帯林のふたつの保護区(ガボン共和国ムカラバ・ドゥドゥ国立公園およびコンゴ民主共和国ルオー学術保護区)において、参与観察による現地調査を実施する。上記の目的(1)に関しては、これまでの調査の蓄積もふまえ、各調査地で住民の生業活動、家計状況、土地利用、社会関係について、聞きとり、参与観察、重量などの測定、GPSによるマッピングなどによって調べる。また、獣害をはじめとした人と自然のかかわりについても同様にして調べる。(2)

については、調査地域の住民組織について調べるとともに、地方都市や首都で自然保護に関わる行政、国際NGO、研究機関などの諸アクターの活動内容や関係性について調査をおこなう。(3)については、住民組織と協働で具体的な開発事業を計画し、実施する。事業の収支を分析することで、経済的な有効性、持続性を評価するとともに、事業を通してみられる住民の社会関係の動態を分析する。以上の成果をふまえて、住民組織、自然保護に関わる政府機関、国際NGO、現地研究者などと議論することで、(4)の提案をおこなう。

4. 研究成果

現地調査を通じてまず、それぞれの調査地における社会的背景、地域住民による自然資源利用、獣害をはじめとする人と自然の関係および文化的特徴が明らかになった。ふたつの地域の共通点として、大型類人猿をはじめとする生物多様性の保全が緊急の課題となっており、さまざまなアクターが開発と保全のための活動を実施していること、地域住民が、自然資源に強く依存した生活を送っていることがわかった。一方で、相違点として、ガボン共和国ムカラバ・ドゥドゥ国立公園周辺では、人口密度が低く、自給的な焼畑農耕以外に産業が乏しいことから、獣害が生活を脅かす深刻な問題になっているのに対して、コンゴ民主共和国ルオー学術保護区周辺では、内戦によってインフラが荒廃し、流通が著しく制限されているため、狩猟過多が問題になっているという対照的な状況が明らかになった。また、ムカラバ・ドゥドゥ国立公園周辺の地域住民は、多様な社会背景をもった人びとから構成されており、流動性が高く連帯が乏しいのに対して、ルオー学術保護区周辺の地域住民は、強固なりネージシステムにもとづいて土地との結びつきと成員の連帯が強固であるという点から、文化的特徴も大きく異なっていた。

つぎに、地域内で実施されている開発と保全に関する事業内容およびそれに関わる国際NGO、行政、研究機関の動向が明らかになった。具体的には、いずれの地域でも国際的な環境保全NGOが事業を実践しており、さまざまな研究機関による研究活動も実施されていることがわかった。これに対して、政府による保全と開発の取り組みは十分ではなく、そのため、自然保護活動の推進によって生じる住民生活への不利益に対する十分な補償はなされていなかった。これらの外部の動向に呼応するかたちで、ふたつの地域では、さまざまな住民組織が形成されており、地域開発と環境保全を目指した取り組みがなされていた。これらの住民組織の形成過程や活動内容は、上述の地域ごとの文化的特徴や自然資源利用の状況の違いによって、異なることが明らかになった。

さらに、これらの住民組織が実施する農業や家畜生産の取り組みに関して、参加型アクシ

ョンリサーチをおこなうことで、有効な開発事業のあり方を社会経済的な観点から検討した。その結果、食料安全保障と安定した生活の確保という観点から、農業や家畜生産などの推進を目指した事業が、いずれの地域においても不可欠であることが明らかになった。熱帯林保全のためには、これら開発事業を適切にモニタリングし、資源の持続的な利用に結びつけなければならないといえる。一方で、ふたつの地域では住民の文化的特徴や地域の社会背景が大きく異なることから、それらを十全にふまえ、地域の特色に合わせて開発事業を計画・実施していく必要があることがわかった。

ふたつの調査地の比較にもとづく以上の結果から、(1) アフリカ熱帯林における人と自然の関わりについて、地域ごとに異なる特色があること、(2) アフリカ熱帯林の保護区において、地域住民が適切に参加した社会経済開発が不可欠であることが、それぞれ明らかになった。そして、(1) にあるような地域社会の特色をふまえて(2) の地域開発事業を推進することで、熱帯林保全と地域開発の両立を図る必要があることがわかった。

以上の研究の学術的成果として、(1) 獣害の状況と地域住民による被害対策の取り組み、(2) 地域住民による自然資源利用とその変化について、それぞれ英語論文にまとめて学術誌に投稿した(査読中)。また、(3) 生態人類学と霊長類学の協同による大型類人猿保全の可能性について、仏語論文をフランスの学術誌に投稿した(掲載決定済)。さらに、(4) アフリカ狩猟採集民の移動パターンと婚姻についての英語総説を学術書に寄稿し、(5) アフリカ狩猟採集民の社会変容に関する英語論文を学術誌特集号に寄稿した。研究成果の社会還元としては、2012年11月に一般向け科学イベントで講演し、2013年7月には静岡県立大学で一般公開講演会を主催した。また、静岡県内の四つの高校で高校生を対象とした授業をおこない、二つの会場における市民を対象とする講演会で講演をおこなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

Matsuura, N., Takenoshita, Y. and Yamagiwa, J. Anthropologie écologique et primatologie pour la conservation de la biodiversité: Un projet collaboratif dans le parc national de Moukalaba-Doudou, Gabon. Revue de Primatologie. in press.

松浦直毅. 「ガボン南部バボンゴ・ピグミーの社会変容の10年」生態人類学会ニュースレター第19号. 2014. Pp.14-15.

八塚春名、松浦直毅、亀井伸孝 「狩猟採集社会の「復元力と脆弱性」: 第10回国際狩猟採集社会会議 (CHaGS10) 参加報告」『アフリカ研究』83号. 2013. pp. 29-32.

[学会発表](計6件)

松浦直毅. 「現代の<森の民>: ガボン、バボンゴ・ピグミーの事例」中部人類学談話会第213回例会.(椋山女学園大学、愛知) 2012年9月.

松浦直毅. 「「プロジェクト」と人類学 アフリカ熱帯林の保全と開発の現場から」(口頭)京都人類学研究会12月例会.(京都大学)2012年12月.

松浦直毅. 「現代の<森の民>: ガボン南部、バボンゴ・ピグミーの社会変容」日本アフリカ学会関西支部例会・京都大学アフリカ地域研究資料センター第194回地域研究会(京都大学)2013年2月.

松浦直毅. 「ガボン南部バボンゴ・ピグミーの社会変容の10年」(ポスター)生態人類学会第18回研究大会(徳島)2013年3月.

松浦直毅、増田弘、山口亮太、木村大治. 「住民参加によるアフリカ熱帯雨林の保全と地域開発に向けて ガボンとコンゴ民主共和国の自然保護区における取り組み」(口頭)日本アフリカ学会第50回学術大会(東京大学)2013年5月.

Matsuura, N. Forest People in the modern world: Recent social changes of the Babongo in southern Gabon. (oral) 10th Conference on Hunting and Gathering Societies (Liverpool, UK) Jun. 2013.

[図書](計1件)

松浦直毅. 「森に入ったケータイ 平等社会のゆくえ」『メディアのフィールドワーク - アフリカとケータイの未来』(羽瀨一代・内藤直樹・岩佐光広編)pp.102-117. 2012. 北樹出版.

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:

権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
<http://babongo.o.oo7.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松浦 直毅 (MATSUURA, Naoki)
静岡県立大学・国際関係学部・助教
研究者番号：60527894

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：